ART NEWS
no.35
2012 Winter

あーと通信

日本画特集号

宝塚大学 造形芸術学部 アート・デザイン学科 美術領域

TOPICS

- 公募展 入選情報　第43回 日展（日本画部）／ 第11回 福知山市 佐藤太清賞公募美術展
- 卒業生のお仕事　田中達也さん（日本画家・保育園職員）
- 「衝撃の国インド」　池尻篤志さん（本学助手）論文研究で訪れたインド紀行
- 卒業制作展・造形展のお知らせ

TOPIC

第43回 日展 日本画部 ｜学生作品

本学講師が特選受賞＆本学の学生・卒業生が
驚異の100% 全員入選！

国内屈指の難関公募展、一日展。

第43回日展（日本画部）に出品した在学生と卒業生が全員入選し、本学の日本画講師である山田毅 講師が特選を受賞しました。

『アトリエにて』 城戸啓吾（修士課程2年）

『ビルに映る』 中川真一（修士課程2年）

『クローゼット』 橋田真季（修士課程2年）

NEXT

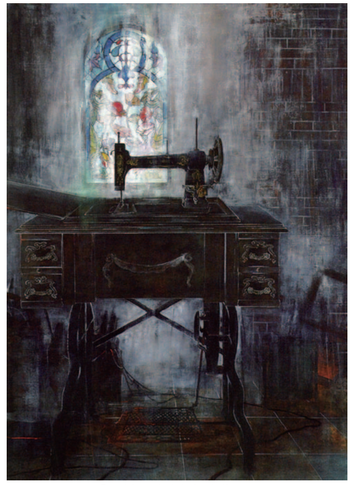
TOPIC

第43回 日展 日本画部 ｜卒業生・教員作品/懇親会

卒業生は仕事と制作を両立させ、
在学時より着々と力をつけて入選を重ねています。

『間にあわない』 志垣玲奈（'11年卒業）

『文通』 池尻篤志（助手）



『沈黙』 田中達也（'09年修了）

田中達也さんは修士課程終了後、保育園で絵画教室のお仕事をしながら日本画の制作をしています。裏面にインタビューの記事を掲載しています。

池尻篤志さんは本学大学院を修了後、 助手として本学でお仕事をしています。在学時は美術史・美術理論を専攻し、修了研究ではインドにあるアジャンタ石窟について研究していました。裏面には修了研究のために訪れたインドについての記事を掲載しています。

東京展を開催するにあたり懇親会が行われ、 新入選のスピーチをする池尻さん（左）と橋田さん（右）。他校の学生や先生方、また日展で活躍する作家の方々と交流できる場です。

左から：橋田さん、池尻さん、田中さん、西 講師、城戸さん(上)、志垣さん(下)、曲子教授、中川さん、山田講師

TOPIC

第43回 日展 日本画部 ｜教員作品

●日展参与 『暁震』 福本達雄（名誉教授）

●会員 『残照』 曲子明良（教授）

特選 『黒潮に立つ』 山田毅（講師）

『祈りの廻廊』 西敏彦（講師）

- 東京展 国立新美術館
  2011.10.28（金）～ 12.4（日）
- 京都展 京都市美術館
  2011.12.10（土）～ 2012.1.13（金）
- 大阪展 大阪市立美術館
  2012.2.18（土）～ 3.18（日）

TOPIC

第11回 福知山市 佐藤太清賞公募美術展 日本画部

『ビルに映る』 中川真一（修士課程2年）

『律の調』 橋田真季（修士課程2年）

▮福知山市厚生会館　2012. 1. 14（土）～15（日）
▮福知山市佐藤太清記念美術館　2012. 1. 18（水）～23（月）
▮東京：板橋区立グリーンホール　2012. 2. 23（木）～26（日）
▮京都：日図デザイン博物館　2012. 3. 7（水）～11（日）　他

TOPIC

宝塚大学 造形芸術学部 卒業制作展・造形展　開催のお知らせ

▮今春の卒展・造形展は **兵庫県立美術館** で開催！
※開館時間は同じですが、会期が違いますのでご注意ください。

兵庫県立美術館 ギャラリー

10:00-18:00 ※金・土曜日は10:00-20:00 月曜日休館／最終日は 15 時まで

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1番1号 TEL:078(262)0901 / FAX: 078(262)0903

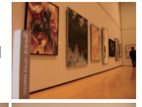
宝塚大学 造形芸術学部卒業制作展

▮卒業制作展

・造形芸術学部 4年生卒業制作
・大学院生修了制作展同時開催

2012.2.29(水)▸▸▸3.6(火)

▮美術領域の展示
美術史・美術理論
洋画/日本画/彫刻
アートセラピー



昨年の造形展の様子（兵庫県立美術館）

▮造形展

・造形芸術学部 全学科1～3年生

2012.3.16(金)▸▸▸3.22(木)

あーと通信 no.35【平成24年1月31日発行】 編集：圓山茂子・上岡秀拓・山縣武・池尻篤志

▮学生作品データベース：http://bijyutsu.takara-univ.ac.jp/image-db ▮美術領域ツイッター：@bijutu ▮E-mail：s-maruyama@takara-univ.ac.jp

宝塚大学
▮ホームページ：http://www.takara-univ.ac.jp
▮TEL：072-756-1231／FAX：072-758-7869

美術News ▮美術領域の情報ネット
http://bijyutsu.takara-univ.ac.jp ▸▸▸

TOPIC

保育園職員・田中達也さん 2008年修士課程修了（日本画）

屋外スケッチにて

好きな事を活かした仕事。

実家で運営している保育園で、事務や絵画教室の先生として働いています。絵画教室では、身の回りのものをモチーフに写生をしたり、屋外にスケッチをしに行ったりしています。子供達の明るい笑顔に癒され、絵を描くモチベーションになったりします。また子供の純粋な眼や感覚に驚かされ、勉強にもなります。制作が忙しくても、ホッと一息つける場所にもなっています。

絵を教えるにあたって気を配っている点は、解りやすい言葉で説明するという事です。基礎からしっかりと構図やその意図を考えながら描いてもらえるように心がけています。そして、個性を尊重し、伸ばしていけたらなと考えながら指導に当たっています。これらの事は全て、私が大学の先生方から教わった事をそのまま実践しています。描くことを通じて、絵だけではなく、人間として成長してほしいと願っています。

着彩を指導中

子供たちの作品

もう1つの顔、日本画家。

私は保育園での仕事と並行し、もう一つの仕事である日本画制作を、卒業してからも続けていて、日展に出品しています。

制作するにあたって一番大切にしていることは現場でのスケッチです。"うまく描く"という事は私とってそれほど重要ではなく、その場で感じる第一感、見えた空気や空間、それによる自分の想いをスケッチに込められるように心がけています。

良く描くモチーフは、人生の中で感じたり見たりした好きな物や風景です。そのようなモチーフを求めて、日本各地に取材へ行きます。また、モチーフを選ぶ際に、生まれ育った尼崎が大きく影響していると感じることがあります。家の近所には田んぼや川、中小企業の工場等が身近にあったりと、場所は違えど、よく似ている風景をモチーフに選んでいる事が多いです。全関西美術展で一席を受賞した『落日』という作品の場所は、私の祖父の工場で、小さい頃に遊んだ記憶のある場所です。展覧会後、祖父の体調不良により、この工場は閉鎖される事になりました。そのような、どこか寂しげで無くなっていってしまうような予兆を、スケッチをしながら感じていたと思います。

小下絵から本画へ

日本画の制作に欠かせないのが小下絵です。小下絵は、作家によって制作方法が色々ありますが、田中さんの場合、何度もスケッチをした後、A4程度の大きさの紙に完成に近いイメージで描いていき、それをトリミングしパネルの形を決め、本画制作に移ります。

●小下絵

●本画『落日』 第56回全関西美術展 第一席受賞

学生と社会人。

大きく違うところは制作時間です。在学時は、毎日朝から晩まで制作できましたが、社会人になるとそうもいきません。社会人でありながら絵を続けていくという覚悟は、私自身強く思っている事なので、寝る時間や息抜きの時間を削って制作しています。また日ごろから"描く"、"観る"を常に頭に置き、普段から歩いている時でも制作のアンテナを伸ばしていられるように心がけています。絵が生活の一部になっていけたらなと思っています。

今後の作品展開について

私は在学時よりこれまで時間の流れや退廃したものをテーマに描いてきました。その流れで、最近はアンティークに興味があるので、これからはそういった物もモチーフに選びながら、その時々に描きたいモチーフや表現に嘘が無いようにしたいと思っています。

また、水や光といった形のないものへもチャレンジし続けていくつもりです。今までは、モノトーンで描く事が多かったのですが、少しずつ色々な色にも挑戦していきたいです。人と違うものを描くとか、誰もやってない事をする事等は重要視せず、結果には拘らず、あくまで"自分らしい作品"という事を考えながら、描いて行けたらなと思います。

私にとって日本画とは、自分との会話であり、社会に自分を認知してもらえる唯一の手段だと思っています。そのためにも私はこれからも本気で日本画を続けていきたいと思っています。

TOPIC

本学助手・池尻篤志さん 2010年修士課程修了（美術史・美術理論）

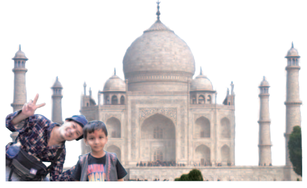
修了研究の為、異国の地インドへ。

助手の池尻です。私は修士課程2年生の時、修了制作と論文でインドにあるアジャンタ石窟の仏教壁画の保存と段階復元模写の研究をするにあたり、実物を見たいと考え、現地へ8日間ほど調査に行きました。インドは初めてということで、ガイド付きでアジャンタ石窟が含まれているツアーに参加しました。ツアー参加者が1人だったので、インド人ガイドとの二人旅となったのは不幸中の幸いでした。友情が芽生え、より深くインドを体感することができました。

『カリヤナ カーリン ジャータカ』
現状写真(出典 高田修著『アジャンタの壁画 I』)

段階復元模写（修了制作）

衝撃の国、インド。



夜中にインドの空港に着いた瞬間、甘い香水、砂ぼこり、動物、汚物の臭いが混ざった日本では経験したことない臭いに出迎えられました。町は、車、バイク、馬やラクダの馬車。その隙間を多くの人、牛、ヤギ、犬、猿、カラフルな鳥がごった返していて、車は常にクラクションを鳴らし、交通ルールはまるで無視。慌ただしい時間が流れていました。しかし、電車が16時間遅れたり、人が道端や駅で昼寝をしていたりという、のんびりした(?)一面も持っています。また常に喧嘩口調で話し、平気で嘘をつき、頻繁に赤い唾を吐き散らし、田舎のトイレは野外･･･。

「ここで8日間生きぬけるのかな？」と正直思いました。しかし、インド人の優しくて温かく、屈託のない笑顔で不安はなくなりました。私のこの旅の合言葉は、「もうどうでもいいや」と「むしろ面白い」の2つで、妥協が大切！細かい事は気にしないという事でした。

私の目指すアジャンタへは、寝台列車で21時間の後、車で4時間半かかる所にあります。寝台列車では、席の予約がいい加減な為、インド人3人と添い寝。終いには追い出され、1人列車の繋ぎ目で3時間も立つ始末。他にも席を転々とさせられたりして、着く頃には、心身ともにボロボロでした。

アジャンタ石窟

アジャンタ石窟は想像をはるかに超えたインパクトで存在していました。石窟の中は薄暗く、絵画を見せるためのライトアップが緑や青に怪しく光り、壁画の前にはロープが張り巡らされ、厳重に保管されていました。

しかしここはインド、所々警備が手薄な石窟もあった事は、調査には幸いでした。その中でも、実際に岩をくり抜いて作ったノミの跡が残る石窟の柱や部屋、岩から半分顔をのぞかせる柱など、資料や図版にあまり載っていないような石窟を造った工程を見れたことに私は興奮しました。また、それはこの旅の意味を強く感じた瞬間でもありました。

他にも、崩れた壁画の断面から土壁の厚みを想像したり、筆遣いや色使いなどを詳しく観察することが出来ました。その中でも限取りの素晴らしさは圧巻で、まるでCGのような滑らかな輩しは、この当時の画家の技術の高さをうかがい知ることのできる証でした。また実際に僧房の中へ入れてもらい、出家が寝ていた岩のベッドに寝転ぶと、タイムスリップしたかのような感じが味わえ、肌で遺跡を感じる事の出来た瞬間でした。

旅を終えて。

今回訪れたインドでは、インド人の凄味を見せつけられました。走り回る人、物を作り売る人、物乞いをする人、駅や道で寝る人、祈る人･･･。「生きる＝生活」だと感じました。何気なく日本で生活していて、色々な事を悩み考える自分も確かに真剣に生きていますが、インドでは、生きる事をよりシンプルに身近に感じ、向き合える事が出来る場所であった気がします。

インドは日本と違い、貧富の差が激しく、またカースト制の名残り強い除の部分も持っています。実際日の当たりにして、胸の詰まる思いを幾度となく経験しました。たった8日間の旅でどこまでインドを知ることが出来たかはわかりません。きっとごく一部しかインドは私に本心を見せていないだろうし、私の勝手な解釈が多いのかもしれません。しかし、私の心にインドは、確かに「生きる事」を語りかけてきた気がしました。